

Title	入江節次郎著 独占資本イギリスへの道：現代への序曲
Sub Title	Britain's way to monopoly capitalism, a prologue to modern times, by S. Irie
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.6 (1962. 6) ,p.608(80)- 612(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19620601-0080
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620601-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

入江節次郎著

『独占資本イギリスへの道』

——現代への序曲——

飯田 鼎

イギリスは、社会科学の領域ではいろいろな意味で古典的・典型的な国として把握されるのが常である。資本主義の発達、産業革命、労働組合運動、そして、社会主義、およそこうした社会経済的な諸事件は実に資本主義の母国イギリスにおいてまっ先におこり、そしてまた市民階級のイデオロギー的反映としての経済学も新興の社会科学としてまさにそこで誕生をみたのであった。従っていやしくも経済学を学ぼうとする者が、手さぐりをするようにして、資本主義とは何か、それはどのようにして発展したのか、そしてまた経済学はどのような社会経済的背景と歴史的必然性のもとに生誕せざるをえなかったかというようなことを考えた場合、当然イギリスを思いうかべるのは自然であるし、誰しもまたそのような経験をもったことであろう。

いうまでもなく、われわれ社会科学に志す者の関心が、多くの場合まずイギリスに集まり、そこを出発点としているという事実は、以上のような純粋に知的な欲求に支えられていることは勿論であるが、同時に実は、その背後に現在われわれがそのなかで無意識に——そして多くの人々にとっては動物的に、(?)生活しているこの高度に発展した資本主義社会が、十八世紀から十九世紀にかけて完成をみたイギリスの資本主義と歴史的につながっているという認識と無関係でありえようか。われわれが他のいずれの国にもましてイギリスの歴史や社会に強烈な関心を見出すのは、おかれて資本主義への歩みを開始し、国家独占資本主義段階とよばれる今日において、その矛盾の様相をますますはげしくつつあるわが国の現実の姿を正しく理解しようとする努力のあらわれにほかならない。そして以上のような視点に立つとき、われわれは入江節次郎氏が新鮮な問題意識に貫かれながらきわめて意欲的にして実証的な研究「独占資本イギリスへの道——現代への序曲」を公刊されたことは、まことに喜びに耐えない。

二

本書は、つぎのような内容から成っている。
はしがき

第一章 「黄金時代」のイギリス資本主義

第一節 「世界の工場」時代の生成

第二節 「黄金時代」の到来と繁栄の様相

第三節 繁栄の諸要因

第四節 「黄金時代」の経済構造

第二章 「大不況」の到来とその意義

第一節 「大不況」を構成する三つの経済恐慌

第二節 「大不況」期の経済的特徴

第三節 「大不況」の諸要因と意義

第三章 「新帝国主義」の時代

第一節 「自由主義的帝国主義」から「新帝国主義」へ

第二節 「新帝国主義」の展開

第三節 「新帝国主義」展開の結果

第四章 産業の「独占」化の進行

第一節 産業の「独占」化形成の諸条件

第二節 産業の「独占」化の諸形態

第三節 産業の「独占」化形成におけるイギリス的特徴

第五章 イギリス「帝国主義」の生成

第一節 イギリス「金融資本」の生成

第二節 イギリス「帝国主義」の特徴

あとがき

目次をみれば明らかなように、本書は、一八五〇年代、産業革命の苦悶と革命的社会主义および労働運動の高揚に終始した「チャーチストの時代」につづく相対的安定期——不安定のなかの安定——としてのウィクトリア時代から、一八七三年の恐慌を画期とするいわゆる十九世紀末恐慌とその後に来るイギリス独占資本主義の形

成期までの社会経済史的研究である。注目すべきことはこれが単なる歴史的な事件の叙述ではなく、帝国主義のイギリス的形態ともいふべき「新帝国主義」について理論的に分析を加えると同時に、その形成と密接な関係にあった産業の「独占」化の過程について詳細にふれていることである。

周知のように十九世紀後半以後、イギリス産業資本の確立から独占資本主義への移行期についての歴史的理論的研究の重要性は、しばしば指摘されてきたにもかかわらず、この分野の研究が、わが国ではともすれば等閑視されていたのは、いかなる理由によるのであろうか。想うにひとつには、日本におけるヨーロッパ社会経済史学の問題意識にかかわるものであり、いまひとつは経済学の理論的研究者たちの間における歴史的軽視に起因していることを指摘しないわけにはゆかない。前者については、大塚史学にみられるような独創的なすぐれた方法論と歴史観に貫かれた実証的な研究を生み出したことは高く評価しなければならないが、同時に、その背後に史料の蒐集や詮索のみを事として、およそどういふ問題を抱いて歴史の研究に従事しているのかわからないというような態度、訓詁的な解釈学や甚だしきは外国文献のひきうつしに熱中している者もまた少なくない。もちろんわれわれは、現代の体制的な危機を強調する余り、そういう視角にのみ問題の所在を求めるとは客観的でないかもしれない。しかしそれにしても、「封建制から資本制への移行」をめぐる十六・七世紀か、あるいはせいぜい十九世紀の三〇年代の産業革命までに研究がとどまってしまうのは一体どう

いうわけであろうか。資本主義の自由競争的段階から独占段階にかけての研究がいわゆる「社会経済史家」と呼ばれる人々によって真剣にとりくまれていないというのは少しおかしい。北村次一のように「歴史の曲り角」のあまりに安直な登場に抵抗を感ずることには賛成であるが、だからといって、いやしくも社会経済史研究の目的が、社会経済の発展のそれぞれの段階における人間の経済生活の真の姿を探求することにあるとすれば、経済史家である限りとくに独占資本主義段階を問題にしないという理由にはならない。社会経済史研究者の側における理論にたいする認識の欠如が大きな問題となるであろう。

また後者については、極端な表現で恐縮であるが、マルクスの「資本論」やレーニンの「帝国主義論」に精通してさえすれば、理論家として通用したということ、さらにいえば、マルクスおよびエンゲルス、レーニンとスターリンからの引用だけで論文が書けたというような事実である。ことわっておくがわたくしは、現在のマルクス主義の理論家のすべてがそうであるというのではなく、かえってそういう傾向から脱して歴史的な方法によって理論を検証しようとする顕著な努力が払われているということを認めるのに吝かではない。ただし依然として理論家の間には理論にたいする偏重の余りそうした歴史的・実証的な態度を欠く場合が少なくないというのである。大体、日本は社会的分業が発展しているためか、学問の領域においても極度に細分化されすぎている嫌いがある。経済学の場合でも、「恐慌論」とか「重商主義」とか、きわめて特殊な専門的

な自己の専攻の分野にこもってしまっていて、それだけで、一人前の学者として通るのが普通であるが、こうしたことも、おそらくは日本だけの特異な現象ではないだろうか。テーマが極度に分化してしまつて、共通の場を見出すことができなくなっていることである。経済学関係の学界が沈滞におちいつているといわれるのも、こうしたことと無関係ではありえない。

迂路に立ちいつてしまったが、これを要するに、理論的な分析と歴史的な実証的方法とが、バラバラになっている傾向があり、この両者を有機的に結びつけようとする努力が、社会経済史家と理論家との双方からなされる必要があると思う。

著者は、この点についてはあまりふれてはいないけれども——おそらく意識してはおられるであろうが——本書がもつともユニークな点、現在の時点においてわが国の経済学研究において果す積極的な役割は、実にここにあると信ずる。著者は、「はしがき」において、「いままでの資本主義経済史は、産業革命の時期までを主として取り扱い、それ以後は、大体、空白のままに残されるか、あるいは、簡単にふれられるにとどめられていた産業革命確立以降、「独占資本主義」生成期までのイギリス経済史をまとめてみたいという欲ばった願いをこめた」と書いておられるが、「たんに空白のまま残されているから」うずめるという態度から進んで、いままで何故に、空白のままに残されていたか、この点についての根本的な認識についても今少し強調すべきであつたと思う。そしてそのことを通じて本研究の意義が一層明らかになるからである。

さききのべたようにこの研究は、イギリス資本主義の爛熟そして衰退の兆候としてのその独占資本主義の生成過程を、豊富な資料を駆使して実証的に把握しようとしているのであるが、「新帝国主義」とくにセシル・ローズのいわゆる「南アフリカ帝国主義」についての描写はなかなか興味深いし、その分析も本質をついていると思う。第三章は本書のなかでもっとも読みごたえのある部分であり、著者もまた異常な熱意をもって書かれたところであると思う。ただ読んでいて少し疑問に思つたことは、「新帝国主義」というものについての解釈である。著者は、「一八七〇年代に端を発する『新帝国主義』が展開される以前に、イギリスは長い帝国主義の歴史をもつていた……」とのべ、そして段階的に、「重商主義的帝国主義」、「自由主義的帝国主義」を、「新帝国主義」に先立つ形態のものとしてあげているが、この場合の「帝国主義」という概念は、レーニンのいわゆる「資本主義の最高段階としての帝国主義」という意味でのそれとは異なっている。レーニンが、「十九世紀末の高揚と一九〇〇—一九〇三年の恐慌。カルテルは全経済生活の基礎の一つとなる。資本主義は帝国主義に転化した」とのべた意味は、帝国主義が十九世紀末から今世紀初頭にかけてはじめてその姿をあらわしたものであるということにはかならない。だとすると著者はこのレーニンの規定に立ちつつも同時にホブソンのいう「新帝国主義」という概念とを併用しておられるわけであるが、この両者の相違をどのように考えておられるのか、必ずしも明らかではないと思う。著者は、第五章イギリス「帝国主義」の生成の第二節の冒頭で、「帝国

主義」の概念にふれ、つぎのようにのべておられる。「さき」に「新帝国主義」の展開を叙述した場合の「帝国主義」は、資本主義の外的側面、国民的側面に対応する世界的側面、なにかんずく、植民地支配の体系をとらえて「帝国主義」と呼んだのである。それはいわば、「資本主義の成立当初から」一貫した「本質的契機」であり、資本主義発展の特定の段階としてとらえたものではなかった。近代的「帝国主義」の概念をうちたてたレーニンによつても、こうした「帝国主義」の用法は認められていたところであつた」と(三二〇頁)。そしてレーニンのいわゆる「労働者を分裂させ、労働者の間で日和見主義を強め、労働運動の一時的退廃を出す」という帝国主義の傾向が十九世紀末および二〇世紀はじめよりもはるか以前、つまり長大な植民地領有と世界市場における独占的地位に支えられた十九世紀半ば以来存在していた」という事実を論拠にしておられる。しかしそれだからといって、イギリス帝国形成への努力、そのための政策——たとえばそれが金銀・財宝の獲得やあるいは有利な貿易差額を目的とするものであれ、植民地獲得を目的とするものであれ、これらと帝国主義もしくは帝国主義政策とを同一視することは少し問題があるのではなからうか。すなわち簡単にいえば「帝国主義」というものの画期をどこに求めるのか、著者のいうように十六・七世紀の重商主義政策も、あるいはその後の自由主義政策も、イギリス帝国建設のための政策的努力であつても、これらをそのまま「重商主義的帝国主義」、「自由主義的帝国主義」と呼ぶことができるかどうか問題であると思う。

以上はイギリス独占資本主義史研究についてのすぐれた研究である。本書を読んで感じた精一杯の疑問であり、著者のいわんとするところを把握することができず、思わぬ誤解をしているかもしれない。もしそうだとすれば御寛恕を請う以外にはないが、ついでにもう一言いわせてもらおうと、イギリスにおける産業独占が、他国に比しておくれたという事実はわかるけれども、それでもこれと新帝国主義とをはっきり離して論じている点が少し気になる。新帝国主義の形成の過程で、産業の独占化の傾向がみられた、あるいは並行しておこなわれた面もあったと思う。著者ものべておられるように、「新帝国主義」の性格は、「独占資本主義」の性格の外的側面にはかならないのである。(二四二頁)とすれば、やはりこの両者を楯の両面としてみる努力が、今少し必要であったと思う。

なお瑣末なこと甚だ恐縮であるが、筆者が気のついた限りにお

いて、ミス・プリントを指摘させて戴くものである。六三頁の一五行目、「数一〇〇万ポンドの金」というのも「数百万ポンドの金」とすべきであろう。また二二五頁の一五行目、「植民地民」というよりは、「植民地人」という方が一般的であると思うがどうであろうか。そのほか二一六頁の二行目、競走企業は競争企業が正しいし、二四二頁の一行目のイギリス、二八二頁の九行目レビーはレヴィとした方がよいと思う。また二八三頁の一行目、クチンスキーは Kuzynski ではなく Kuzynski である。再版の折に改められることを期待するものである。おわりに、このユニークな研究の上に立って、筆者がさらに大きな課題、イギリス労働党の成立期の研究に邁進されんことを、同じテーマにとりくむ者として、心から希望するものである。(ミネルヴァ書房・昭和三七年二月刊・四六判・三五〇頁・五三〇円)

——一九六二・三・一一・深更——

新刊紹介

堀江正規著

『日本の労働者階級』

従来、日本の労働者階級の現状を日本資本主義の生産方法および蓄積方法の特徴と結びつけて分析した書物はきわめて乏しかった。このことは、労働者階級の窮乏化法則が資本主義の蓄積過程からきりはなして論じられがちであったのに照応している。実際、「出稼型」のような賃労働の型、「企業別縦断的労働市場」のような労働市場の型、「年功序列賃金」のような賃金制度の型などにはめこむような分析が横行している。

その反面、日本資本主義を分析した書物は、たいてい、資本・独占資本、地主、国家権力などの面から、いわば「上から」分析したものが多く、労働者階級の状態についての分析には及ばないか、きわめて不十分な分析に終っているものが少なかった。このことは、

多くの経済学者が日本の労働者階級について全く不十分な理解しかもっていないことにもとづいている。

ところが本書は、日本資本主義の生産方法および蓄積方法の特徴にもとづいた労働者階級の状態分析であり、また、いわば「下から」の日本資本主義分析でもある。そういう意味で本書は劃期的なものであるといえる。

著者は、「I 労働者階級の歴史的的地位」の中で、手短かに、マルクス・レーニン主義にもとづく、分析の視角を明らかにしている。そうして「II 資本主義的生産の発展と労働者階級の物質的状态との関係」の中で、窮乏化法則とはどんなものであるかを理論的に解明した上で、「III 日本における労働者階級の現状」で、与えられた統計資料を批判的に利用した分析の典型を示している。しかもこのような現状をもたらした日本資本主義の歴史的發展の特徴を「IV 低賃金と無権利の歴史的条件」の中で、要領よくまとめてから、この現状を克服しうる諸条件が成熟しつつあるにもかかわらず、日本の労働者が現状でいかにやりくりしているかを「V より高い生

活様式のもとで、労働者階級はどう生きていくのか」という章で指摘している。そうして最後に、現状を維持している戦後日本資本主義の特徴を、世界資本主義の現段階における矛盾の激化という条件のもとで、宿命論的にでなく、浮きぼりにしている。要するに、著者自身のべているように、本書の分析は、労働運動を捨象しており、それゆえ「実践の指針となりうるような具体性」をもって解決の道を示してはいないが、読みごたえのある、最近まれにみるすぐれた労働問題研究書であることはまちがいない。(岩波新書・二〇二頁・一三〇円) 一黒川俊雄

リチャード・パイプス編
気賀健三・和田敏雄訳

『ロシア・インテリゲンチア』

この本には、革命前のロシア・インテリゲンチアに関する論文二編と、現代のソビエト・インテリゲンチアに関するもの三編、インテリゲンチアとは何かの論文一編、計六編